

抱樸 かわら版 DX



【2023年度報告】

2024
vol.4

もくじ

ごあいさつ	01
沿革	02
希望のまちプロジェクト	03
特別寄稿：	06
わたしがいる あなたがいる なんとかなる	
事業紹介	10
相談事業	11
困窮者・ホームレス支援	12
子ども・家族支援	14
高齢福祉	15
居住支援	16
就労支援	18
刑務所出所者等への更生支援	18
障害福祉	19
地域共生社会創造	20
政策提言・周知活動	24
会計報告	25
応援メッセージ	26
サポートのお願い	28
法人賛助会員	28
事業所一覧	29



2024年2月、奥田理事長が「未来のいしずえ賞 教育部門」を受賞しました。同賞は未来に向かって豊かな社会の礎を築くために目標に向け強い意志をもって活動し努力を重ねた方々へKODAMA国際教育財団より贈られる国際賞です。



抱樸の由来

「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。

抱樸は原木を抱き合う人々の家。

樸を抱く——「抱樸」こそが、

今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。

ホームを失ったあらゆる人々に今呼びかける。

「ここにホームがある。ここに抱樸がある」

表紙

2023年9月16日に抱樸館北九州10周年記念行事を開催。
記念作品（ほうぼく4文字を手形で表現）をみんなで作りました。

裏表紙

2023年度は3つの事業所が10周年を迎えました。①抱樸館10周年記念行事の集合写真②デイサービス抱樸10周年記念イベント猿回しの様子③多機能型事業所ほうぼく10周年記念旅行の柳川の川下りの様子

あなたが自分をあきらめても、 私たちはあなたのことをあきらめない

皆さまからのご支援を受けNPO法人抱樸（ほうぼく）は活動開始36年を迎えることができました。長きにわたる活動のお支えを心より感謝申し上げます。そして、今後もよろしくお願い申し上げます。

「ひとりの人との出会い」からはじまり「看取りまで」伴走する。抱樸は、従来の「自立支援＝解決型支援」の枠を超え「人生支援＝伴走型支援」という独自のスタイルで活動してきました。家が無い人には家を。仕事が無い人には仕事を。問題や課題の解決が大切であることは言うまでもありません。しかし、「自立が孤立で終わる」のでは本当の意味での「解決」とは言えません。アパート入居後「僕の最期は誰が看取ってくれるだろうか」と眩かれた方がいました。その思いにいかに応えるのかを模索した日々でした。

抱樸はこれまで「ひとりの出会い」つまり「個別支援」を積み重ねて参りました。そこでは「自立」や「社会復帰」が大きなテーマとなってきました。しかし、一方で「自立とは何か」「はたして復帰したい社会か」ということも問い続けてきました。個々人が抱える「生きづらさ」、そのすべてを本人の「自己責任」と済ませて良いのか。自立とは決して孤軍奮闘することではなく、人と人が助け合い、頼り合い生きて行くことではないのか。抱樸ではそのようなことを考え続けてきました。

私たちは、これらの「問い」に応えるべく「個別支援」に加え、2019年秋から「希望のまちプロジェクト」を開始いたしました。以来、多くの方々のお支援をいただき2023年9月には社会福祉法人の認可を得、2024年4月には建築に関する「入札」を開始することが出来ました。しかし、結果は「不落（不成立）」という大変厳しいものでした。

これまでの経緯についてご報告させていただきます。2020年4月に暴力団本部事務所跡地を引き受けました。当初は、2024年秋に開所を目指し計画を進めました。しかし、その後思いも及ばない事態が次々に見舞われました。コロナパンデミックの拡大、2022年2月にはウクライナ侵攻がはじまり、2023年以降急激な円安（輸入資材の高騰）、物価高騰。2023年5月にはコロナは5類となりましたが経済に与えた影響は大きく、2024年7月現在、抱樸の炊き出しに並ばれる方の数はコロナ前の倍になっています。

そのような中、希望のまちプロジェクトも対応を迫られてきました。当初4階建て総工費10億円（設計料含）の計画を3階建てに変更、予算も13億円に上げました。多くの方々がそれに応えてくださり全国からのご寄付は3億円を上回りました。日本財団は「みらいの福祉施設建築プロジェクト助成」5億円を決定くださり、不足分は地元金融機関が融資を決定くださいました。そうして13億円が達成されました。しかし円安や資材高騰の影響はそれをさらに上回りました。入札は不落となり、応援いただいた方々申し訳ない思いでいっぱいになりました。

それでも私たちは「希望のまち」を諦めるわけにはいきません。苦しんでいるのは私たちだけではありません。倍増した炊き出しの人数、相談者の群れ、「想定外の困難」を担わされている方は少なくないと思います。だからこそ人と人が支え合える「希望のまち」が必要であると私たちは確信しています。

どうか、抱樸の活動と希望のまち建設を今後も応援ください。抱樸の挑戦は続きます。「わたしがいる。あなたがいる。なんとかなる」。私たちは諦めません。よろしくお願い申し上げます。

沿革

1988.12 「北九州越冬実行委員会」活動を開始

1990.06 「北九州越冬実行委員会」の事務局体制を整備
「北九州越冬実行委員会」の代表を守谷栄二、事務局長を奥田知志とし、活動を本格化。この年、子どもによる襲撃事件が多発し、小学校や中学校の訪問を始める。

1992.04 居宅支援開始 以後NPO発足まで50人支援

1996.01 小倉での拠点炊出し方式始まる

2000.11 「NPO法人北九州ホームレス支援機構」認証

2001.03 「自立支援住宅事業」開始

2002.07 「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」成立

2004.09 北九州市委託事業として「ホームレス自立支援センター北九州」開所
自立支援機能を拡大化。市内の500名ほどに達したホームレスがこれより減少へ。

2004.12 国税庁より「認定NPO法人」に認定される

2005.04 「自立生活サポートセンター」発足

2007.04 「抱樸館下関」開所（2017年まで）

2007.06 「ホームレス支援全国ネットワーク」発足（代表：奥田知志）

2007.07 北九州市内に餓死者が出る（「おにぎり食べたい」と書き残して餓死した事件）

2007.09 7月の事件を受け、「ホームレス支援の現場から見た北九州における不適正な保護行政に関する抗議と保護適正実施に向けた提言」を北九州市に提出

2008.09 リーマンショックが起こる

2009.02 ホームレス急増を受け、「緊急シェルター抱樸館」開所

2009.10 第1回「ゴーイングホーム・デイ」を開催

2010.05 福岡市に社会福祉法人グリーンコープが「抱樸館福岡」を開所（運営に協力）

2010.07 福岡県より「地域生活定着支援センター」を受託

2011.03 東日本大震災が発生

2011.05 東日本大震災の被災避難者支援として、「絆」プロジェクト北九州・伴走型支援事務所開設（北九州市協働）

2011.10 リーマンショック後の若年困窮者の支援として、「若年者就労支援事業」開始（2015年より就労準備支援事業として制度化）

2013.08 「生笑一座」第1回公演

2013.09 「抱樸館北九州」「デイサービスセンターほうぼく」開所
*高齢者福祉事業を開始

2013.10 「多機能型事業所ほうぼく」開所
*障害福祉サービス

2013.10 「子ども・家族まるごと支援事業」開始

2013.10 社会的就労事業「笑い家」開始 だし巻き玉子の製造（2018年まで）

2014.05 「互助会」発足 自立者互助組織から、地域互助組織へ

2014.07 団体名称を「NPO法人抱樸」とする

2015.04 「生活困窮者自立支援相談事業」を中間市で開始

2016.06 熊本地震が発生（ボランティアを派遣）

2017.09 「見守り支援付き住宅・プラザ抱樸」開始
*サブリースによる「住宅確保支援」と「生活支援付家賃債務保証事業」を開始

2018.05 「ほうぼく第2作業所」（就労継続支援B型）開始

2018.11 「共同生活援助（グループホーム）」開始

2019.08 「更生保護・入り口支援モデル事業」受託

2019.11 「希望のまちプロジェクト」開始

2020.04 新型コロナウイルス感染症の流行により緊急事態宣言が発令

2020.04 コロナ緊急生活支援プロジェクト
*クラウドファンディングにより1億円達成

2021.09 「生きるための包括支援事業」開始（ライフリンクより受託）

2023.04 「重層的支援体制整備事業」開始（北九州市より受託）

2023.09 「社会福祉法人抱樸」設立

2023.12 「希望のまち寄付キャンペーン」3億円達成
「希望のまち」へのご寄付は継続して受付中

2024.01 能登半島地震が発生（ボランティアを派遣）

希望のまちプロジェクト

わたしがいる あなたがいる なんとかなる



2022年春から建築が始まるまでの間も、この予定地を地域の皆さまとの出会いと交流のために活用したいと「にわかプロジェクト」に取り組んでいます（運営はボランティアによる「きぼうのたまご委員会」）。大規模マルシェや竹あかりイベントでは、多くの方が笑顔を交わしました。また「SUBACO」と名付けたプレハブ小屋では、集いの拠点として毎週カフェや「まちの先生」企画としてワークショップを開いています。「希望のまち」づくりは、すでに始まっているのです。

SUBACOでの定例の催しも、まちに馴染んできました



「にわかプロジェクト」の最新情報は
インスタで発信中!

●**にわかカフェ**
みんなの居場所になるため、誰でもが参加できる場として毎週火曜日午後15時に無料カフェをオープン。

●**「まちの先生」企画**
地域にいらっしゃる方に、好きなこと・得意なことを披露し教えてもらう機会。にわかカフェに合わせて月に2回開催。

●**地域清掃**
月に1回、ボランティアのみなで地域を清掃しています。道行く方々にお声がけし、まただんだんと声をかけてもいただけるようになってきました。

●**みんなで庭しごと**
豊かな生態系が出来つつある「予定地」の植物のお世話をしています。

5月



「星空映画会」を開催。小倉焼きうどん研究所のご協力で、映画を見ながら焼きうどんも頂くことができました。

7月



「なんでも相談会」(主催：いのちと暮らしを守るなんでも相談会実行委員会)に敷地を開放、抱樸も協力してフードパントリーなどの催しを開催しました。たくさんの方々が夕涼みがてら訪れてくれました。

8月



2回目のシャボン玉イベント! やっぱりビシャビシャになりながら大人も子どもも楽しみました。

10月



「移動動物園」(主催：コドモいきいき広場北九州)に敷地を貸出。430名を超えるご来場がありました。

11月



2回目の「にわマルシェ」を開催。すっごくよい時間でした!

当日の様子を3分の動画 (Youtube) で視聴できます。



12月



「竹あかり」は、昼間のマルシェとの2段構えの大企画。「希望のまち」の1階レイアウトを実寸で敷地にラインを引き、解説を聴きながら歩いてみる「空想ツアー」も開催。

「超高齢社会体験ゲーム」というボードゲーム (https://comcop.jp/) をSUBACOでやってみました。「地域で活躍するキャラクター」の中から自分が演じたい人を決めて、社会資源を活用したり人とのつながりを増やしながらか「社会的孤立」を解消するというゲーム。実際に私たちが住んでいる「まち」でのつながりのイメージが出来て学びが深まりました。抱樸にはこのゲームの認定ファシリテーターが、3名もいるのです!

2月



希望のまちを実現するために



画像提供：手塚建築研究所

◎プロジェクトの実施体制

希望のまち応援団・寄付者

たくさんの個人および団体の方々から応援・ご支援をいただいています。

希望のまちプロジェクト推進本部

代表：奥田知志 (NPO法人抱樸理事長) 代表：奥田知志 (NPO法人抱樸理事長)

希望のまち推進協議会

実行団体：北九州市社会福祉協議会、高齢社会をよくする北九州女性の会、フードバンク北九州ライフアゲイン、子ども食堂ネットワーク、グリーンコープ生協ふくおか 北九州地球本部、NPO法人抱樸 * 2024年1月30日時点

希望のまち たまご委員会

予定地のSUBACO (プレハブ) を中心に地域コーディネーター

コミュニティデザイン：山崎亮 (株式会社studio-L代表)

構築会議議長：稲月正 (北九州市立大学教授)

プロジェクト事務局 (NPO法人抱樸)

建築設計監修

手塚貴晴 + 手塚由比 (株式会社手塚建築研究所 代表)

▶進捗報告

2022年7月 「希望のまち推進協議会」発足

2022年10月 グランドプラン (基本計画) 発表

2023年9月 「社会福祉法人抱樸」設立

▶▶これからの進行予定

24年度 建築開始

26年度 「希望のまち」まちびらき

◎寄付額の中間報告

建築費用の一部として、目標3億円の寄付キャンペーンが2022年4月からスタート。全国からたくさんのご支援をいただき、2023年12月末目標を達成することができました。心より御礼申し上げます。

2023年12月31日時点「希望のまち」への寄付総額 327,482,271円

(2022年度ふるさと納税 50,964,489円、及び2023年度クラウドファンディング40,638,859円を含みます。)

※3億円の寄付キャンペーン達成を受けて、2024年度に入り施設建設の入札を行いました。入札額が予定価格を上回ったため不落 (不成立) となりました。さらなる設計、資金計画の見直しを行い、2024年9月現在、年内の再入札をめざして準備を進めています。*希望のまちへのご寄付は、下記の通り継続して受け付けております。

◎希望のまちへのご寄付について

希望のまちを作るには、皆さまの力が必要です。このプロジェクトは、この日本社会を照らすものになると信じています。ぜひ寄付という形でこのプロジェクトにご参加ください。

【振込の案内】 ●ゆうちょ銀行からお振込みの場合

01750-9-173501 特定非営利活動法人抱樸 (トクヒ) ホウボク

●他行からお振込みの場合

ゆうちょ銀行 (9900) 一七九 (イチナナキュウ) 支店 当座 0173501

●クレジットカード

希望のまちの特設サイトよりご寄付いただけます。

希望のまち
▼特設サイト▼



【特別寄稿】

わたしがいる あなたがいる なんとかなる

抱樸の活動や希望のまちの実現のために、日頃からたくさんの方々にお力添えを頂いております。抱樸とさまざまな形で関わる皆様より、抱樸や希望のまちについて昨年自由な形式でエッセイを寄稿していただきました。ここではその一部をご紹介します。

藤原辰史 (歴史学者)



「希望のまち」

行き場のない人、希望を失った人、そんなひとたちが、あたたかい味噌汁で胃袋を温め、だれかのあたたかい言葉で心がぬぐり、自分を肯定するきっかけを作り、だれかのあたたかい言葉で心がぬぐり、生きていく気力を取り戻す。

こんなまちが日本中にできると、困る人たちが出てくる。

世の中にはもっと困った人がいるのだから、君は恵まれていることを自覚しなさい、と言って賃金の低さやサービス残業を正当化する人たちは、その「困った人たち」が希望のまちでつぎつぎに「希望を持った人」になるので、もう賃金を下げられないし、やりがい搾取もできない。行き場のない人たちへの援助を自分の高級腕時計や高級車を購入するためのビジネスにしか考えていない人たちは、自分の金蔓と虚栄心を失うだろう。

ただデスクに座ったり、人に指図したりするだけで大量の報酬を受け取る天下りの人たちは、希望のまちではたらく人たちや暮らす人たちがあまりにもまぶしくて、自分の生きがいのちっぽけさに気づき、辞表届をしたためるだろう。

そうやって、企業で威張るだけがとりの人やエッセ福祉事業者や天下り官僚たちも、自分がはずかしくなって、近所の希望のまちにやってくるかもしれない。

そこではじめて、ひとのためにはたらき、まなび、わらうことが、どれほど自分の心を満たすのかを知るだろう。

希望のまちの最終的なミッションは、貧しき人々の救済ではない。この世界に蔓延してひさしい、貧しき精神の救済なのだ。

マヒトゥ・ザ・ピーポー (GEZAN)



苦しい時代を生きている。

人を殺すのに理由をつけ、その理由にカタルシスを感じた輩が暴徒と化し理由を倍速で加速させる。人が当然持っているべき尊厳を平気で奪う戦争は、海の向こうの遠くで起っているという理由で視線を合わすこともなく、目の前の暮らしに埋没する。

仕方がない。 生きることで精一杯だもの。

わたしの暮らしがただあることにささやかな感謝をしながら目をつむり、耳を塞ぎ、口を閉じよう?誰もこの沈黙に文句なんて言わないさ。だから息を潜めて過ぎ去るのを待てばいい。そんな歪んだ卑しい心が自分の中には確かにある。きっとあなたの心の中にも目を凝らしてみれば、そんな因子がカビのようにこびりついていることに気づくはずだ。

そんな世界を当たり前と呼ぶ冷たい世界の中で、希望について考えている人たちがいる。想像することを今一度喚起させる集団がある。希望が「まち」をつくっていく過程がわたしたちに横たわる。こんな奇跡みたいな時間が目の前を通過していくことを、風が過ぎ去るのを待つが如く無視するのか?この痛みを引き受けた抱樸の姿に何も感じなくていいのだろうか?別に選べない人を責めたりするつもりはない。心と呼ばれる場所が自分のことでいっぱいになる時、何も感情が湧いてこないなんて体験は例外なく自分の中にもある。愛がいかに余白の中からしか生まれえないか、その軽薄さに真夜中、肩を叩かれ問いかけられることがある。

でもこのままでいいなんて思わないし、わたしは希望がある世界で生きていたいと思う。仕方ないとかそんなもんだとか、そういう言い訳みたく弁明には飽き飽きしている。とてもとてもシンプルなこと。こんな動きをしている抱樸が倒れるような世の中が正しいとは思えない。

そう、だからとても簡単なことを最後に問う。

あなたはどんな世界を生きていたい?

花岡真琴 (抱樸職員)



ひとりひとりに名前があって、それぞれにこれまで生きてきた人生がある。だから、できるだけ顔と名前は覚えようと決めた。

炊き出しやパトロールで、その日出会った人の名前や特徴、話したことなどをとにかく毎回書き記した。

「もう誰も相手にしてくれないから呼ぶ名前なんて言わなくていいやろ。」「なんで名乗んなきゃいけないんや。」

「おお、覚えとってくれたんか。」「今日は何話そうか。」

誰もあなたのことを知らない、と言わせない。あなたのことをおぼえている、私の中にあなたはいる、と伝えたかった。

初めて北九州へ来た10代の私は、困窮者支援の現場を目の当たりにして、人生をひっくり返されるほど衝撃を受けた。そして、自分に絶望した。私もひとりでは生きてはいけない。私も誰かにおぼえてもらいたいと思うひとりだった。

そんな私が北九州へ来て、ボランティアとして関わり始め、今は抱樸で仕事をさせてもらっている。毎日色々ある。良いことばりな訳はない。たくさんのお会いもあるが、別れの方がやっぱり多い。それはしんどい。できれば見送りたい。長生きして欲しい。

北九州に来て、10年。ライフステージも変化した。息子を出産した時、「人は生まれてきてくれただけで、生きていてくれるだけで良いのだ」と改めて強く感じた。

どんなことがあっても、生きていればみんなで笑い、泣き、共に生きていける。出会いから看取りまで。抱樸は関わり続けることを大事にする。誰もあなたのことを知らない、と言わせたくないと思死になっても、結局私一人ではなんとかならないこともわかった。炊き出しだって、支援だってみんなできるからできる。

これから希望のまちでどんな出会いがあるだろうか。これまでの出会いがどう広がって行くのだろうか。

つつい日常に手いっぱいになってしまう私だけれど、今は今の自分にできることをし続けていきたいと思う。

ここでの出会いや関わりは、私の希望だ。

これまでの出会いに、つながりに私はたくさん教えてもらった。

なんとかなる!

北條みくる (抱樸職員)



喫煙所は抱樸館の憩いの場のひとつである。花札に興じているひとあり、窓の外をボーッと眺めている人あり、他愛のない話に花を咲かせている人もあり。大好きなタバコを片手にひとりひとりがリラックスして過ごしている。そんな喫煙所だから、おいちゃん達の本音がポロッと飛び出すことがある。その日、私が喫煙所に顔を出すとOさんがひとりソファに足を投げ出してタバコを吸っていた。Oさんは仕事を失って元々は路上で生活していた。2年前に抱樸館に入居し、半年間かけて、体調を整え、貯金を溜めて、家を探して、今では近所で一人暮らしをしている。抱樸館卒業後も、Oさんは頻りに顔を出してくれて、その度に抱樸館の雰囲気がパッと明るくなった。煙草をふかしながらOさんがつぶやいた。「あれは人間関係のリハビリだったと思うよ」Oさんは続けた。「路上生活をずっと続けていると、人との関わり方を忘れちゃうわけよ。誰を信じていいのか分からなくなったりさ。そんなだったから、抱樸館は変な奴も多いけどさ、人間関係の築き方を思い出せたのはよかったと思うよね。」そう言って、Oさんはわははと笑った。確かに抱樸館で暮らしていると、はじめは固かったおいちゃん達の表情がどんどんとほぐれてくる。Oさんもはじめは大人しくて真面目な印象だった。でも今は、おっちょこちょいな私の行動に毎度「ばーかやろー」と突っ込んでくれる愉快なおいちゃんだ。Oさんが変わった、というよりも抱樸館で過ごしているうちに本来のOさんが表に出てきたのだろう。そういえば、先日の夜間パトロールで出会った現役路上生活のおいちゃんも、Oさんと似たようなことを言っていた。「自分が何なのかわからないのよ。長らく人と話していなかったから。彼はとても混乱した様子だった。ベテランのボランティアさんが彼の支離滅裂な言葉を根気強く拾っては「大丈夫ですよ。ちゃんと会話になりますよ」と話しかけて、安心させていたのがとても印象的だった。自立支援というと「家」や「仕事」を探すことにフォーカスされがちだが、おいちゃん達を何より支えていたのは日々のさりげない会話だった。「おはよう」「調子はどう?」「すみません」「ありがとう」呼吸をするように交わしている言葉たちが、私達の日常を豊かに彩っていること。そして、そんな日常は声をかけあう相手がいるからこそ成り立っている奇跡であることをOさんは改めて思い出させてくれた。Oさんはそんな毎日を「人間関係のリハビリ」と呼んだが、私もおいちゃん達との交流によってケアされているうちのひとりなのだと思う。希望のまちでも、きつと助けたり助けられたいを繰り返しながら、何気なくもかけがえのない日常が紡がれていくのだろう。そんな未来がやってくるのを今か今かと楽しみにしている。

有留佳乃 (抱樸職員)



抱樸が大事にしている言葉に「出会った責任」というものがある。それだけを聞くと、何か、重くのしかかってくるように感じる人もいるかもしれない。責任なんか簡単に持てるか、と思うかもしれない。特にいまはなんでも「自己責任だ!」とする人たちの声が大きくて、「責任」はこわい言葉になってしまっている。でもわたしは実際に、この言葉に支えられたことが何度もある。以前のわたしは、だれかがつらそうにしている、「わたしなんか声がかけたって、なんの助けにもならないんじゃないか」「もっとふさわしい人がいるんじゃないか」と思って何もできなかった。家族であるとか、何でも話せる親友だとか、「わたしであるべき理由」がないと一歩が踏み出せなかった。だから抱樸の人たちに出会って、とてもびっくりしたのだった。自分の家族でもなく、すごく仲が良いからでもなく、「出会った」というその事実だけを理由に関わり続ける。そして「出会った責任があるから」と言うその表情は、重々しくて神妙な面持ちなんかではなく、とても軽やかなのだ。いまは、目の前にいる人がしんどそうな時、いまにも消えてしまいうような時、いつも「わたしには責任があるから、この人のそばにいていいんだ。支えたいと思っていいんだ」と思える。この言葉がなかったら、わたしはびびって、逃げてしまっていると思う。「出会った責任」という言葉がくれたのは、プレッシャーではなく勇気だ。隣にいる理由だ。だれも、ひとりきりだと思いつつ死にたい人なんていない。そして、これまでひとりですんでしまった誰かがいる人。それは、あなたに責任感が足りなかったということでは決していない。抱樸が「出会った責任」を軽やかに言いのけられるのは、志が高いから、素晴らしい人たちだからではなく、その相手に職員やボランティアみんなに関わろうとするからだ。だれもひとりですんでない社会は、「みんな」が肝だ。だからわたしは「希望のまち」をつくりたい。だれかが苦しんでいることについて、自己責任なんか存在しない。そんな冷たくてとげとげした言葉を浴びせあう社会では、とても生きていけない。だけど抱樸に心を寄せ、応援してくれているあなたから、「希望のまち」はすでに始まっている。ここから、あなたから、わたしたちから、「出会った責任」を広げていきたい。

後藤正文 (ASIAN KUNG-FU GENERATION)



北九州の困窮孤立者を支援する団体を支援するときの難しさは、その距離の遠さと、近さなのではないかと思う。

端的に言って自分の町のことでない、と考える人もいるだろうし、あるいは、遠くパレスチナやウクライナで行われている大きな非道と比較して、小さな問題だと考える人もあるのかもしれない。

大きな視点と小さな視点を行ったり来たりしているうちに、どの問題から取り組めばいいのかわからなくなってしまう。そんなことよりも待たなして押し寄せてくる人生や生活上の問題で精一杯になってしまう。僕にもそういう経験がたくさんある。

そういう時には、カリフラワーやブロッコリーという野菜を思い浮かべてみる。よく見ると全体のかたちと細部のかたちがよく似ていることがわかる。一番小さな、かなり近寄って見ないと分からないような先っぽの形が反復するようにして小さなまとまりになり、それらが中くらいのまとまりになり、そうしたいくつものまとまりが集まってできた野菜だということがわかる。人間の細胞や組織にも似たようなところがあるらしい(例えば、肺胞)。

僕らの社会はこれと似たようなところがあるのではないかと思う。私たちの人間らしい愚かさの繰り返しによって、戦争や紛争が担保されているよう

に感じる。反対に、社会や世界全体を覆う問題が、家庭にも教室にも職場にも同じような顔をして転がっていると思う。

抱樸の取り組みは、確かに遠い町に暮らす僕やあなたの生活を直接的にまた瞬時に変えることはないと思う。ただ、僕はブロッコリーやカリフラワーや自分の肺胞のかたちを思い浮かべながら、繰り返されるかたちのどこかひとつが変化して、それが全体に行き渡る場面を想像する。

今、あなたや僕が誰かのために投げ出した温かい何かが、全体のなかで反復する。微力だとしても全体性に作用する。北九州で起こった「希望のまち」の精神が、その在り方が、施設そのものが、いろいろな町で反復する。そんな日を想像する。そうやって社会や世界は、少しずつ前進するほかないのだと思う。

そこにあなたが存在しているのだと、奥田さんは言った。こんなに心強い言葉が他にあるだろうか。僕はこの思いが、社会全体に、あらゆる地域に、あるいは自分自身の生き方のなかに、繰り返すように響いてほしいと願う。自ら響かせたい言葉だと思う。そういう社会のほうが、人生のほうが、僕は幸せな気持ちで生きられると思う。

どうか「希望のまち」が実現しますように。それは僕の希望でもある。



特別寄稿：わたしがいる あなたがいる なんとかなる
全文はこちらのリンク先からご覧いただけます。
(<https://note.com/npohouboku/n/naefb397ce6d8>)

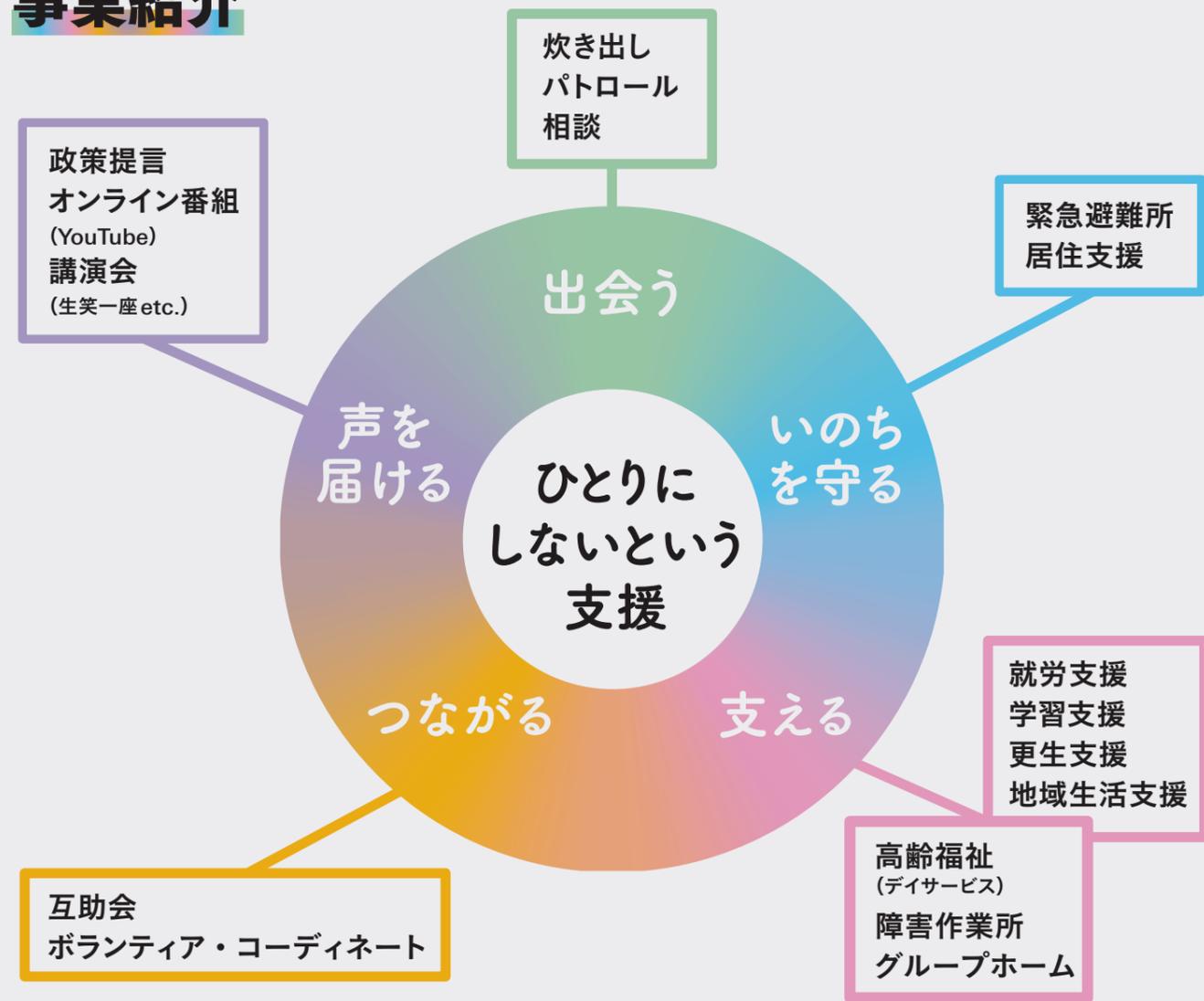
コラム1

ホームレスとハウスレスは違う

私たちは「ホームレス(社会的孤立)」と「ハウスレス(経済的困窮)」は異なる状況だと考えています。「この人には何が必要か?」と「この人には誰が必要か?」の両面を考えます。以前、中学生から襲撃を受けていたホームレスの方がこんなことを言っていました。「あの中学生は、家(ハ

ウス)はあっても居場所(ホーム)、心配してくれる人がいない。心配してくれる人がいない者の気持ちは、俺は(ホームレスだから)わかるなあ。その言葉で、私たちはハウスレスとホームレスは違う、ホームレスは路上生活者に限らないことに気づかされました。

事業紹介



数字でわかる抱樸



相談事業



生活のお困りごとや心配など、まずはお話をお聞きします

ひとりで悩んでいてもなかなか先が見えない。そのようなときに相談できる場所があれば、次に進む勇気が持てたり、自身の気づかなかった可能性が見えてくることがあります。誰かに話を聞いてもらうだけでも違うものです。相談に来る方のお話やお気持ちを聞きながら、複雑に絡み合った困りごとを紐解き、今後のことを一緒に考えます。

◎ホームレス自立支援センター北九州

・巡回相談（北九州市委託事業）

生活に困窮した方の全般的な相談にのっています。ご本人からだけでなく、弁護士や警察、病院、一般の市民の方からも「〇〇さんの相談にのってほしい」と依頼があります。また、ホームレス状態の人にこちらから出向き相談を行なうアウトリーチ型の相談事業も行っています。

・火曜相談会

ホームレス状態の方向けに、毎週火曜日に開催している相談会。決まった時間・決まった場所に相談できる先があることで助かる人が大勢います。

*2023年度：相談件数 262件

・法律相談会

ホームレス・困窮者支援に協力していただける弁護士・司法書士・社会保険労務士のグループ「法律家の会」メンバーが、毎月1回の法律相談会を開催しています。

◎重層的支援体制整備事業

社会福祉法の改正に伴い重層的支援体制整備事業が誕生し、北九州市では2023年8月から事業を開始しました。

当法人では、北九州市から①継続的に支援を届ける伴走型支援事業、②社会との接点をつくる参加支援事業、を受託しています。2023年度は門司区と八幡東区で実施し11世帯に関わり、色んな方の「こうしたい、あそしたい」という気持ちを叶えていくことのお手伝いをしています。

北九州市における包括的な支援体制の構築に向けて、この事業を通じて行政や関係機関が連携しやすい体制をつくっていただけるように、関係者と対話をしながら試行錯誤しています。



◎中間市市民生活相談センター

生活に困っている方の相談事業として、中間市からの委託事業「市民生活相談センター」の運営を行っています。

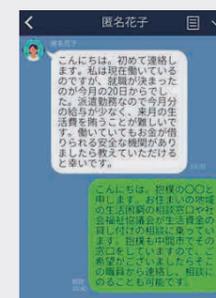
*2023年度：相談件数 439件（内新規183件）

◎生きるための包括支援事業・つなぎ支援（ライフリンク委託事業）

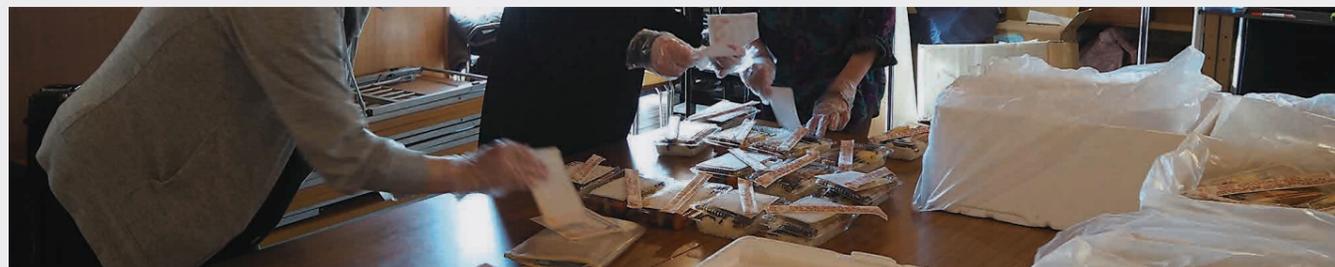
2021年度から開始した自殺対策事業です。自殺を考えている人のお話を聞き、切迫性や緊急度が高い方に対して、継続的な架電や必要な場合は福祉的資源につなぐといった支援を行っています。

◎LINE相談

生活の相談は、お電話やメールだけでなく、LINEでの相談も受け付けています。



▶ 困窮者・ホームレス支援



自立が孤立に終わらないために

社会に居場所がない。困っているのに、「助けて」と言える誰かがいない。生きることに疲れ果て、自分が困っていることにさえ気づけない。私たちの周りには見えるところにも、そして見えないところにも多くの孤立と困窮があります。

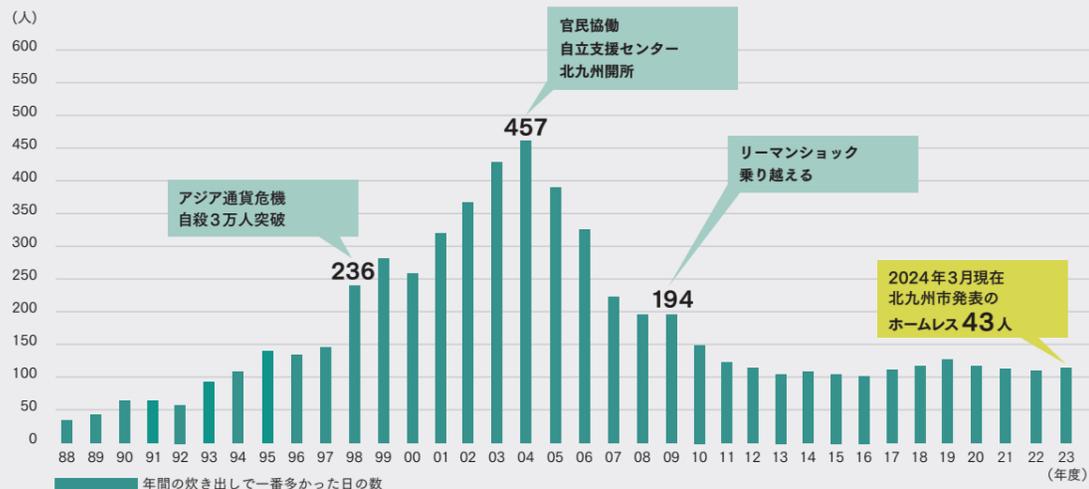
抱樸は社会から「自己責任」と言われ疎外されてしまった方々に寄り添い、次のステップへ進むための伴走を行なっています。それは、本人や家族ばかりに責任を求める社会の風潮のなかで、赤の他人も含めて「助けて」と言える社会をつくるための活動です。

●炊き出し・パトロール

北九州市小倉北区の勝山公園で、年間30数回の炊き出しをしています。炊き出しの後は、北九州市内・下関の7方面に分かれて、炊き出し会場に来られなかった方を訪ねるパトロールを行なっています。お渡しするお弁当は、炊き出し協力団体(※)のボランティアの皆様が準備したもので、お配りする衣類は全国から寄付で集まったものです。炊き出しはいのちを守る活動であり、「これからの相談」につながる出会いの場でもあります。

※炊き出し協力団体：カトリック黒崎教会／カトリック水巻教会／カトリック小倉教会／カトリック戸畑教会／カトリック湯川教会／日本バプテスト連盟枝光キリスト教会／若松バプテスト教会／日本バプテスト連盟シオン山教会／日本バプテスト連盟東八幡教会／日本バプテスト連盟小倉キリスト教会／日本キリスト教団若松浜ノ町教会／日本キリスト教団東篠崎教会／聖小崎ホーム／ファミリーホームやまだホーム／下関グループ／立正佼成会小倉教会／にじ屋（順不同）

炊き出しで出会った人数の推移



*2023年4月～2024年3月 炊き出し回数32回のべ人数3446名（うち女性249名）平均107.7名/回

●ホームレス自立支援センター北九州

主に就職を目指す方の支援施設として、北九州市から「ホームレス自立支援センター北九州」の運営を委託されています。2004年9月にスタートし、これまでに1,500人を超える方が利用。ハローワークとの連携により、多くの方が仕事を見つけて施設を出発していきました。求職だけでなく、自動車免許などの資格取得も支援しています。



●自立支援住宅

2001年、北九州ではじめての自立支援の仕組みが自立支援住宅です。ホームレス状態からそのまま入居できる「家」を準備し、複数のボランティア担当者が伴走しながら、地域への出発を支えます。自立が孤立に終わってはならないの思いから、担当者とのつながりは入居者が自立支援住宅を出た後も続き、お見舞いや誕生日のお祝い、そして看取りまで行ないます。

*2001年5月以降のべ216名の方が新しい生活へと出発しました。



●緊急シェルター抱樸館

路上生活は大変過酷で、いのちに関わります。路上生活をする方が減少している現在でも、年に数名は路上で逝去、または緊急搬送先の病院で治療が間に合わず亡くなるという現実がこの日本にあります。わたしたちは北九州市内にシェルターを準備し、緊急避難のための場所を確保しています。



ボランティアの声

片山正剛さん（互助会・なかまの会の世話人）



抱樸との出会いは30年前。当時は炊き出しに並んで、お弁当をもらっていました。まさか自分がボランティアをするようになるなんてね。ボランティアは好きでやっています。みんなで冗談をいいあいながら、地域清掃をしたり、炊き出しの仕分けをしたりするのは楽しいです。2023年のゴーイングホーム・デイ（運動会）では副実行委員長を務めました。みんなでわいわい騒いで久しぶりに童心に帰った感じがしました。今までずっとひとりだったから、今は仲間がいるのが楽しいし安心です。自分が動けるうちは自分ができるところをやりようと思います。

*「なかまの会」は、路上から自立した皆さんが、再びひとりぼっちにならないように、そして人生の終わりにはみんなで看取り・送ることができるように、と作った互助グループでした。そのようなつながりが地域全体に広がっていけばという思いから、「なかまの会」を土台として、2014年に「互助会」をつくりました。

▶ 子ども・家族支援



子どもの困窮は「家族の困窮」

相談を受けるなかで、「幼少期に学校に行けなかった」「昔から家に居場所がなかった」という話をよく聞きます。子供時代の経験は、その後の人生を大きく左右するものです。しかし、「子どもの貧困」が約9人に1人ともいわれ、貧困が親から子に連鎖している現在の状況では、親の責任を求めたところで問題は解決しません。

抱樸はこの困窮の連鎖を断ち切るため、2013年から子どものいる困窮世帯や社会的孤立状態にある世帯の支援事業を行っています。子どもへの学習支援を中心にしながら、その家族に対しても包括的かつ持続的な支援をしています。

学習支援

◎集合型学習「スイトレ」

2013年から、子どもたちへの学習支援をスタートさせました。学校や家庭の環境といったさまざまな事情により勉強したくてもできない状況に置かれてしまう子どもたちの学習支援を無料で行なっています。集合型の学習支援「スイトレ」では、大学生や社会人のボランティアにも協力してもらいながら、宿題や受験勉強のお手伝いをしています。このスイトレは、多くの子どもたちにとって親や家族以外の大人と話せる場所、安心できる放課後の居場所にもなっています。



◎訪問型学習支援

さまざまな事情から集合型の学習支援に出てこれないような子どもたちには、家庭訪問による学習支援も行なっています。訪問を続けていると、子どもだけでなく親との関係も作られていくので、家庭全体の生活支援につながることも多々あります。ママやパパから医療や体調、生活、学校、お仕事や医療、介護の悩みなどを聞き、私たちにできることはないか、一緒に考えます。なかには、引っ越しのお手伝いをすることもありました。

◎社会参加

子ども時代から色々な人や物事に触れることで、人生の選択肢が広がるのではないかと。子ども時代に「誰かから大切にされた」という経験を持つことで、自分のことを大切に思い、そして誰かのことも大切に思える人になるのではないかと。そのようなことを考えながら、私たちは子どもたちが家庭や学校だけではない「社会」に触れるためのプログラムやレクリエーションも行なっています。一緒に釣りや海水浴に行ってみたり、クリスマスや夏祭りなど季節のイベントを行ったりもしています。



◎よるかふえ

安心できる居場所として「よるかふえ」を運営しています。写真は、生まれてから一度も誕生会をしてもらったことがない高校生のために、同学年の子の発案で開催した初めての誕生会。一方、勉強している子もいる雑居っぷり。これが、居場所「よるかふえ」です。

*コロナ感染防止対策で、2023年度は休止中



◎その他の生活支援

私たちの支援は学習だけに限りません。家族と学校との関係のご相談に乗ったり、必要があれば求職や医療、介護的なご相談を受けたり、ただ話を聞いたり。そのようなつながりを持つなかで、子どもも親も幸せを感じられるようにお手伝いします。また、子どもたちが成長しても、そこで支援が終わり、というわけではありません。大人になった彼・彼女らに対し、「困った時にいつでも助けを求められる場所」として残っていくためにも、少ないスタッフ数ではありますが奮闘の日々を送っています。コロナのため、多くの事業が休止となりましたが、小学校・中学校の卒業式にはスタッフが参加。高校合格発表にも付き添い、喜びを共有しました。

*2023年度対象者人数 子ども145名とその家族

▶ 高齢福祉



支援は「出会い」から「看取り」まで

私たちは、出会いから看取りまでの支援をします。住み慣れた地域で安心してその人らしく生活できるように、介護事業も行なっています。

◎デイサービスセンター デイサービスセンター（地域密着型通所介護）を運営し、高齢者の生活支援を行なっています。*2023年度は13名の方が登録され、毎日7～9人の方が通っています。

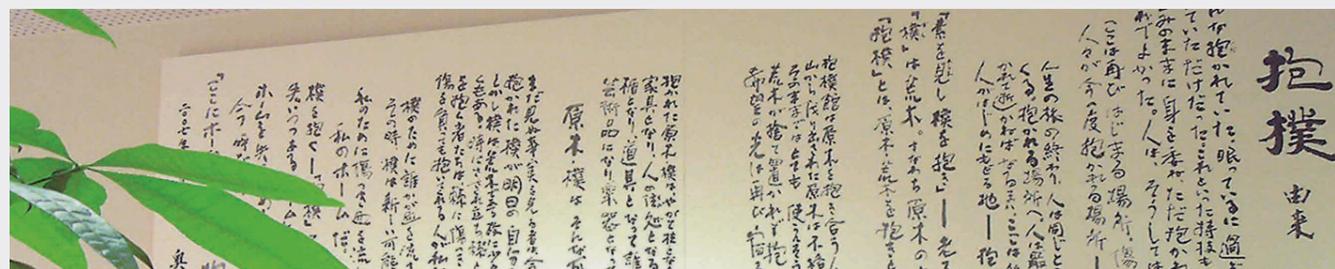
1日の流れ

- 09:00：送迎
- 10:00：利用開始、バイタルチェック、入浴、
アクティビティ、機能訓練（体操など）
- 11:00：嚥下体操（飲み込み訓練）
- 12:00：昼食
- 13:00：アクティビティ（塗り絵、トランプ、誕生日会など）、
機能訓練（体操など）
- 15:00：おやつ
- 15:30：利用終了、送迎



デイサービスの皆さんの作品が八幡東区年長者作品展で八幡中央ロータリークラブ会長賞を受賞しました。（2023年9月）

▶ 居住支援



「家」から始まる生活の基盤づくり

住居を失うということは、第一に「生存的危機」、第二に「社会的危機」、そして第三に「孤立の危機」を意味します。住居を失い、路上生活になるという事態はすぐさま生命の危険を意味します。また、あらゆる行政手続は現住所地での手続（申請）となります。住居を失うとすべての社会的手続ができなくなります。さらには、人は一定の場所に暮らすことで地域社会への参加の基礎を築きます。これらの意味で、住居を確保することは何よりも優先される課題（ハウジング・ファースト）であると言えます。

「居住支援」とは、建物（ハコ）を含む総合的概念であり、「子どもを育て、客を招き、社会活動を行ない、生活していくこと」を支えるものです。相談、住宅確保、保証人確保及び社会的手続き支援、生活支援、見守り支援、孤立防止と社会や地域への参加支援、葬儀を含む死後事務など、本人の生活（人生）全般にかかわる支援です。

●抱樸館北九州

「抱樸館北九州」は、多くの方々の寄付によって建てた入居施設です（2013年9月オープン）。路上生活を脱出し自立した人たちのなかには、障害や金銭面などさまざまな生きづらさを抱えるために、どうしても地域生活に馴染めず、施設入所も難しい人たちがいます。そんな方たちを迎える場所が必要でした。

「ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所」。1階にあるレストランには、「抱樸由来」と題した大きな額が掲げられています。

【施設概要】

- ・1階 レストラン、デイサービスセンター
- ・2～3階 完全個室の居住スペース（30室）、入浴施設
- ・24時間のスタッフ配置

*2023年度 入居者数29名（2024年3月）新入居5名 退去6名
2020年10月1日より、日常生活支援住居施設（※）に認定（北九州市認定）



※ 生活に困っている方向けに家賃を低く抑えた無料低額宿泊施設のうち、面積や耐震・耐火性能など一定基準を満たした施設に対して、行政が生活支援のためのスタッフ人件費を助成する制度が2020年10月1日から始まりました。抱樸は、制度開始当初からこの認定を受けています。

●見守り支援付き住宅

（プラザ抱樸 / グループホームほうぼく）

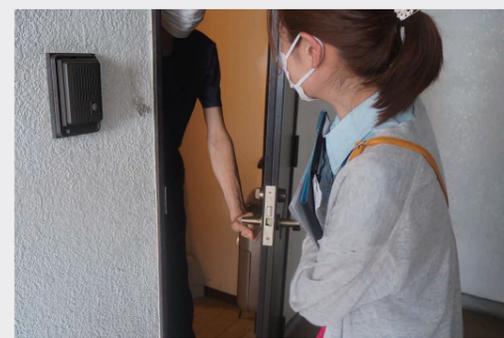
2017年9月からスタートした見守り支援付き住宅（プラザ抱樸）は、単身生活が可能であるものの何かあったときのための見守りや、時として生活支援が必要な方に対して、住まいと生活支援、家賃の保証を組み合わせ「持続可能な居住提供」を実現するモデルです。2021年6月からは20室を「日常生活支援住居施設」（生活保護法に基づく制度事業）として運営を開始したことで、より手厚い支援が可能となりました。

見守り支援付き住宅と日常生活支援住居施設、さらにはグループホーム（共同生活援助）を組み込むことで、支援ニーズに応じた「断らない支援」が可能となっています。

コロナ禍で開催を見合わせていた、プラザ入居者間や地域の方が交流する「サロン」としての活動も少しずつ再開しており、抱樸としての居住支援のあり方をこれからも模索していきます。

【物件内容】

小倉北区（12階建てマンション）全室リフォーム済み、共同玄関オートロック、トイレ・浴室別



*2023年度入居者数 72世帯（2024年3月末）+ グループホーム11名（2024年3月末）

プラザ抱樸入居者の声

松島雅明さん

アパートでひとり暮らしをしていましたが、立ち退きに合い、自立支援センターに入所しました。今年で63歳になりますが、歳も歳なので、見守りがあった方が安心だと思い、プラザ抱樸に入居しました。白内障の手術に付き添ってもらったり、健康面で色々気にかけてもらったりするのがありがたいです。日中は抱樸の多機能型作業所に通い、車の部品の点検の仕事などを行っています。休みの日はのんびり過ごしていますが、プラザ抱樸のイベントに参加することもあります。春は花見に参加しました。ひとり暮らしの時にはなかった人との交流が今はあります。



近所の公園の花壇に花を植える町内会活動にも参加するようになりました。

●「自立支援居宅協力者の会」による入居マッチング

不動産事業者がNPOと連携し住居喪失者の居住支援を実施するための組織で、現在、福岡県内50社を超える不動産事業者が加入しています。「自立支援居宅協力者の会」の加盟企業が賃貸物件を紹介してくれるおかげで、北九州の活動での住宅確保率は100%！会の主な働きとして、①不動産物件の紹介、②入居後の見守り、③家賃滞納などの早期発見とNPOへの連絡、④退去や死去時の残置物処分などに関する協働を行ないます。

●賃貸借契約時の保証人の提供

私たちは「住みたい」と「貸したい」を橋渡しするために、賃貸借契約を結ぶ際に家賃債務保証を提供しています。提供するものは「保証」と「暮らしの安心」です。

さらには、債務保証会社による家賃債務保証と抱樸の生活支援を組み合わせ「断らない家賃保証」サービスの提供も開始しました。ビジネスを組み合わせ、いのちを支えます。

▶ 就労支援



仕事に向かうための土台づくり

私たちは「仕事」全般にかかわる支援に取り組んでいます。「仕事」は、稼ぐ・生きるための手段ではありません。生きがいや誰かに必要とされることの幸せも、「仕事」のなかにはあります。

◎就労準備支援事業（中間市・北九州市受託）

さまざまな課題を抱え、すぐに仕事をするのが難しい方と一緒に悩み、考え、状況に応じた支援を行なっています。多様な研修や協力企業での就労体験を通して、本人にあった就労を目指します。

*2023年度（北九州市：研修生38名、中間市：研修生2名）

◎技能講習（厚生労働省受託事業）

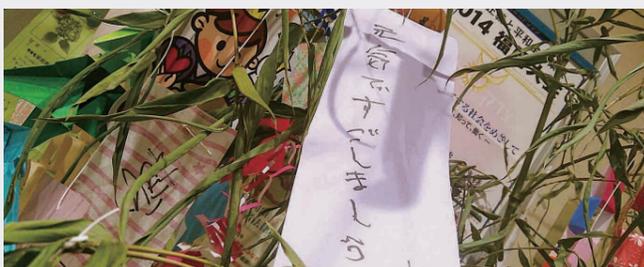
運転免許など免許の取得や技能の習得を支援することで、就職の可能性を広げるお手伝いをしています。

*2023年度：受講数131件

◎無料職業紹介

無料職業紹介事業所の許可を受けて、働き手を求める企業と働きたい人をマッチングさせる支援をしています。

▶ 刑務所出所者等への更生支援



誰もがやりなおせる社会へ

抱樸は刑務所から出所した方への支援も行っています。出所しても家や仕事探しなど、さまざまな面で家族や知人の支援がないと生活の再建は困難です。刑務所にしか居場所がないような孤立した方を生み出さないための支援が必要です。

◎地域生活定着支援センター

高齢・障害などの困難により生活苦に陥り、犯罪に走ってしまう方がいます。たとえば、全国にある48ヶ所の地域生活定着支援センターには、高齢・障害などの課題を抱える方から、年間1,600件を超える支援依頼が来ています。

◎入口支援の取り組み

2021年度から地域生活定着支援センターの業務に、「被疑者等支援業務」が追加されました。刑事司法手続きの入口段階にある被疑者・被告人等のうち、福祉的な支援を必要とする方に対し、釈放後安心して生活できるよう支援をします。

*2023年度：新規相談110名（うち出口支援67名、入口支援43名）

コラム2

自己責任と出会った責任

現代において「自己責任」という言葉は、「出会った責任を回避する」言葉として使われているように思います。「それはあなた自身の問題だ」と言い切ることで、「その人を助けなくてもよい」と言い放つ社会（「自己責任論社会」）になってしまっているようです。しかし、私たちはやはり「出会い」には責任があると考えています。「出会い」は時に深刻で、時に豊かな影響を私たちにもたらします。

そして、人は一度出会ってしまうと、どれだけ忘れようと思ったとしても、決してそれを「なかったこと」にはできないのです。もちろん出会いから生じたすべての責任を「とる」ことは私たちにはできません。しかし、出会った責任は「ある」のだから。そう思い続けることで抱樸の活動は35年間続いてきました。

▶ 障害福祉



撮影：高村吉祥丸

生きづらさを抱えても役割のある生活を

抱樸は、就労継続支援B型と生活訓練の事業所を運営しています。

ホームレスや生活困窮状況に陥る方のなかには、さまざまな生きづらさを抱えている方がいます。そのひとつが障害です。生きづらさがあっても役割を見出し、その人らしく生き生きと能力を発揮してもらいたい。障害のある方の仕事づくり、生きがい、居場所づくりのために就労継続支援事業を行なっています。

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）：2023年度登録者数32名（一日平均利用22名）

ほうぼく第2作業所：2023年度登録者数32名（平均利用20名）

【2023年度 作業内容】

- ・高齢者施設やマンションの清掃
- ・ウエス加工
- ・箱折りなどの施設内作業
- ・自主製品やお菓子の製造・販売
- ・自動車部品の研磨・検品
- ・農作業と収穫物を用いた製品づくり



小倉南区の農園を借りて色んな野菜を作っています

ほうぼくストア

<https://npovol.stores.jp>

作業所でつくった「まごころ製品」を通販しています。売上は利用者さんの工賃になります。ぜひご覧ください。



抱樸の人気キャラクターほうぼくん



手編みのコースター



フェルトボールのしおり



フェルトボールのフラワー

コラム3 伴走型支援とはなにか？

「伴走型支援」とは、抱樸が提唱する支援のあり方です。これは深刻化する社会的孤立に対応するために、「つながり続ける」ことを目的とした支援として生まれました。その人が直面している経済的困窮や住まい・健康上の課題などを解決する「問題解決型支援」は不可欠です。しかし、問題解決型支援が行き過ぎると、「解決できたか、できないか」という「成果主義」に陥る危険性があります。伴走型支援は「解決」という結果ではなく、「つながり」という状態を重視します。どんな結果になるのであれ、「生きてつながっていること」に最大の価値を見出します。決して「ひとりにしない」こと。それが私たちの支援の根幹にある想いです。

▶ 地域共生社会創造



誰もが互いに助け合える仕組みを

私たちは、支援の専門性を高めると同時に、市民参加型の「社会づくり」を目指しています。地域の隣人としての見守りや助け合いが、「孤立」を生まないための何よりの力になるからです。出会いから看取りまで。「ホーム」を失った方たちとともに生き、支援／被支援の関係性を超え、「お互いさまの社会」を実現させるために、抱樸をプラットフォームにして、たくさんの「出会い」や「交流」の機会をつくりたいと願っています。

●地域生活支援（自立生活サポートセンター）

抱樸での支援を受け、地域での生活を再開した方々の見守りおよび生活全般の支援を行っています。再野宿化や孤立化を防ぐためには、いつでも気軽に相談できる場所が必要です。

支援内容は、病院への付き添いや買い物の同行、引っ越しのお手伝いなど多岐にわたります。

日々の生活で生じる困りごとの相談をお聞きし、必要な機関や人とつなぐだけでなく、共に地域で生活する人間として、互いに尊重しながら支えあう関係を地域に構築することが目標です。



① 就労支援・定着支援

② 住居支援

③ 福祉事務所等との連携による支援

④ 健康・保健支援

⑤ 親族・地域との交流支援

⑥ 福祉制度等活用による支援

⑦ 法律・人権支援その他

⑧ 定期訪問

⑨ 互助会連携

⑩ 看取り等支援

⑪ 金銭管理支援



安否確認訪問



葬儀の支援

*2023年度実績：支援件数のべ17,532件 支援人数のべ5,742名

●ボランティア

抱樸にとって欠かせないのが、ボランティアの存在です。実際に私たちの活動はすべて、ボランティアから始まっています。また、地域共生社会を実現するうえでも、ボランティア活動への参加はとても大切なことだと考えています。

ボランティアで行なう活動は各「委員会」が企画し、活動のコーディネートは抱樸のなかに設置した「ボランティア事務局」が担当しています。（ボランティア活動にご興味のある方は、P29をご覧ください）

●委員会が主導する活動、3つの柱

・炊き出し

2020年度以降、コロナのため食事スペースの撤去、時間短縮など余儀なくされていましたが、2023年度は星空カフェ、年度末には食事コーナーを再開することができました。コロナ禍で始まった、全国から当事者の方へのメッセージを募り、お弁当に添えて手渡しする「炊き出しお手紙作戦」は、今も続けています。



・自立支援住宅

住まいを失い、「助けて」といえる関係性を失った方を抱樸館北九州に迎え、ボランティアが伴走支援する取り組み。入居希望者との面談から入居式をへて、必要な福祉サービスや医療へのつなぎ等を行いながら、つながりを重ね「ホーム」になることを目指します。コロナの影響で様々な制限が続いていましたが、2023年度は音楽、体操の両プログラムをそれぞれの講師のご協力で定期的に行うことができました。

・自立後サポート

① お見舞いボランティア

施設や病院におられる方々を定期訪問するボランティア活動。2020年度以降はコロナの影響で活動が止まっていたが、2021年度からクリスマスカードの発送など工夫しながら徐々に活動を再開し、2023年度は計3回、5名の方々をお見舞い訪問することができました。



①

② 誕生日カードのお届け

抱樸が支援に関わった方々へ、月ごとに誕生日カードを作成、寄せ書きし、お送りしています。2023年度は12か月計734通を発送しました。



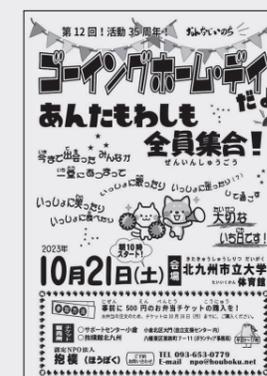
②

③ なごみカフェ運営

抱樸館北九州のレストランで毎月第1水曜日に「互助会」活動としてどなたも参加できる交流会「なごみカフェ」を運営。2023年度は10回開催（8月、2月は感染症対策で中止）し、このうち奇数月にはプチバザーも行い、にぎわいました。



③



ゴーイングホーム・デイ再開

ゴーイングホーム・デイ（GHD）は、2009年に始めた「出会ったみんなが集って楽しむ運動会」です。《なんちゃって家族》《大きな家族》を目指して活動してきた中で、《共通の思い出》の時間をつくりたい...となった時に奥田理事長が「家族といえば運動会やろ!」と言いだしたことから、北九州大学の体育館を借りてのオリジナルの運動会（かくし芸の時間もあり）の企画が始まったのでした。

◎互助会

月500円の会費で、誰でも参加可能な互助グループです。出発点となったのは、路上から自立した後、再びひとりぼっちにならないように、そして人生の終わりにはみんなで看取り・送りたいと考えた、自立者のみなさんがつくれた「なかまの会」です。助けられたり、助けたり——そんなつながりが地域に広がればと、なかまの会を土台に、「互助会」ができました。互助会は「人はひとりでは生きられない」を基本に、3つの精神を大切に活動しています。



- ①「なかま」——仲間をつくる、仲間になる
- ②「お互いさま」——助けられたり助けたり
- ③「ふるさと」——助けて、と言える居場所をつくる

互助会は「共に生きる地域社会の創造」を行なうための事業であり、地域に開かれた大きな家（ホーム）です。誰もが「なかま」。いつでも、どなたでも歓迎します。

※互助会のなかには、野宿の経験を分かち合える当事者グループ「なかまの会」もあります。

【活動内容】

① 互助会レター

行事カレンダーやその月に誕生日がある会員の紹介など、会員交流のための「互助会レター」を毎月発行しています。安否確認もかねて、一人暮らしの方には、なるべく手渡しでお届けしています。遠方の方には郵送でお届けします。



①

② 誕生日会

コロナの影響で開催できない時期も続きましたが、2023年度は毎月第3水曜日をベースに開催。8月、12月は感染症対策のため見送りながらも翌月に合同で開催することで、みなさんの誕生日を祝うことができました。

③ 炊き出しのための衣類物資仕分け作業と地域清掃

毎週金曜日に八幡東区の倉庫に集合して実施しています。

※2023年度：32回実施（1回平均8.0名参加）

④ お祝い金・お見舞金

長寿やご結婚のお祝い、また入院お見舞いも出しています。金額はささやかでも、その方のことをみんなで思います。

※2023年度 卒寿（90歳）0名、米寿（88歳）1名、傘寿（80歳）4名、喜寿（77歳）7名、古希（70歳）6名



②

⑤ イベント

長らくコロナ禍で休止してきた催しを、2023年度は少しずつ再開、改めて日常的に顔をあわせ、わいわいする大切さを実感できた1年でした。かつて毎週3回だったなごみ開放は、まず「なごみカフェ」から。毎月第1水曜午後、抱樸館北九州レストランにいろんな方々が三々五々集ってにぎやかな風景が戻りました。「春の野外交交流会」も約80の方が参加。5月の新緑に囲まれた公園でみんなでミニ運動会に歓声をあげました。年度末には、昨年度好評だった浪曲師玉川奈々福さんの公演も行いました。



⑤

⑥ お助け活動

「助けられたり、助けたり」。互助会員が得意なことで、お困りごとのお手伝いする「お助け活動」をやっています。前年度に引き続き、2023年度も70代の刃物研ぎの「プロ」が隔月で、抱樸館北九州でその技を見せてくださいました。



⑥

⑦ 互助会葬

「なかまの会」の会員が亡くなられたとき、互助会のみんなで葬儀を執り行ないます。だれが自分を看取ってくれるのか？「なかまの会」ができた背景には、さまざまな事情で社会的孤立に陥った自立者の切実な思いがありました。「なかまの会」が大切にしてきた葬儀は、互助会で最も大切な活動として受け継がれています。生前をともに過ごしたなかまやボランティアが故人をしのび、思い出を語り合います。葬儀には故人を知らない人も多く参列します。ともに過ごした時がなくても、精一杯生きた人生を、みんなで心に刻みます。2021年度からは、互助会に入っておられない方々のご葬儀に互助会より献花をお届けする取り組みを始めました。

※2023年度 互助会葬：14人をお見送りしました 参列者総数：のべ440名
互助会員以外の抱樸葬への参列献花10名



⑦

⑧ 偲ぶ会

「なかまの会」では年に1度、先立ったなかまを追悼する「偲ぶ会」を開いています。互助会となっても毎年欠かさず、続けています。壇上に懐かしい遺影を並べ、一人ひとりの名前と没年を記した「追悼幕」を掲げます。抱樸が支援にかかわり、亡くなった方で引き取り手のなかった自立者の方々も、一緒に追悼しています。現在、追悼幕には200名以上の方々のお名前が記されています。

※2023年度開催 10月5日 参加数：60名



⑧

⑨ お電話作戦

コロナ禍で会えない状況が続くなか、単身独居で介護サービスの利用や抱樸の事務所への定期的な来訪がない73歳以上の会員のみなさんを対象に、お電話をかけおしゃべりする活動を始めました。

※2023年度：4、5、6、7、9、10、1月に実施

ボランティアの声

古井愛野さん（炊き出しボランティア）



抱樸の炊き出しは6年前に就労準備支援事業のプログラムの一環として参加したのが始まりです。就労支援は1年で卒業しましたが、炊き出しボランティアはその後も続けて通っています。人見知りですが、炊き出しでは色々な人が声をかけてくれるので、ボランティアの人達ともおっちゃん達とも随分仲良くなりました。仕事は忙しいですが、ボランティアは強制ではなく「行けるときに行こう」というスタンスでやってきたので、ここまで長く続けられたような気がします。最近ではSUBACOのイベントのお手伝いなどもしています。私にとって抱樸は気軽に顔を出しやすい居場所。これからも自分のペースでボランティアを続けていきたいです。

▶ 政策提言・周知活動

ホームレスを生まない社会を目指して

私たちは、目の前の方をどう支えるかと共に、ホームレスや孤立の状態にある方を生まない、誰もが生きやすい社会をつくるための活動も行なっています。その一環として、行政への提言活動や広報・周知活動に取り組んでいます。

●政府・行政への提言

抱樸が会う方は、困窮・困難な状況に置かれており、自ら助けを求めることができなかった方々です。その人たちに代わり、社会問題やあるべき支援を国や自治体に提言していくことが、出会ったものの責任だと考えています。目の前にいる困っている方への支援と分析・提言により、“ひとりも取り残されない社会”を目指します。

●講演会

「ホームレスを生まない社会の創造」を目指して、困窮の現状を知ってもらうべく全国各地で講演活動を行なっています。ホームレスや生活困窮者、多重債務者、刑務所出所者に対する偏見、誤解は依然として存在します。ひとりも見捨てられることのない社会を実現するために、支援が必要な方の状況や背景を知らせていきます。

いきわらいちざ

●生笑一座

理事長の奥田や副理事長の谷本が、野宿経験のあるメンバーと「人生」について語りながら、ワークショップや歌などを披露する一座です。2013年の結成以来、小中学校を中心に全国で公演を行なってきました。「もう死ぬしかない、と思ったけれど、今、生きていて本当によかった。生きてさえいえば、笑える日が来る」というメンバーの“本当のことば”は、つらい思いを抱えている子どもたちに響いています。

●ほうぼくチャンネル

コロナ禍により対面の講演会の中止が相次いだ2020年、「より広い層に抱樸の理念や活動を知ってもらいたい」と、5月にYouTubeで番組配信〈ほうぼくチャンネル〉を開始。2023年度は、藤沢久美さん（国際社会経済研究所IISE理事長）、中島岳志さん（政治学者/東京工業大学教授）、今井紀明さん（認定NPO法人D×P理事長）、鈴木晶子（NPO法人パノラマ理事、認定NPO法人フリースペースたまりば事務局次長）らをゲストに招き、23番組をお届けしました。

●情報発信

SNSでも随時情報発信をしています。フォローや拡散のご協力をお願いいたします。


<https://linktr.ee/npo.houboku>



【2023年度の主な提言活動】

社会保障審議会生活困窮者自立支援及び生活保護部会九州厚生局地域共生社会推進会議
重層的支援体制構築推進人材養成研修・広報啓発事業研修企画委員会
社会資本整備審議会住宅地分科会
住まい支援の連携強化のための連絡協議会
令和6年能登半島地震福祉関係団体連絡会議

【2023年度の主な講演会（オンライン開催含む）】

・自治体の人権研修会、市民集会
・企業の勉強会
・イベントトークゲスト
・居宅支援協議会等での講演
・大学での講義

【2023年度受賞】

一般社団法人KODAMA国際教育財団第7回未来のいしづえ賞（奥田理事長）



会計報告

令和5年4月1日～令和6年3月31日

科目	金額（単位：円）	
	2022年度	2023年度
I 経常収益		
受取会費収益	2,934,000	2,492,000
寄付金収益	214,912,639	210,247,972 ①
助成金収益	28,952,294	5,731,067 ②
補助金収益	5,808,926	5,174,778 ③
事業収益等	223,118,411	221,829,981 ④
受託事業収益	307,982,859	325,498,351
雑収益/その他収益	29,700,749	26,406,232
経常収益計	782,586,207	797,380,381
II 経常費用		
1 事業費		
人件費(役員報酬含む)	306,368,495	319,428,538
法定福利費	43,733,808	46,690,795
福利厚生費	633,468	510,290
旅費交通費	15,359,568	10,773,481
消耗品費	19,344,401	17,623,001
通信費	10,349,361	10,333,024
水道光熱費	14,407,759	15,454,682
賃借料	14,544,574	17,160,908
委託費	35,370,307	20,841,610
租税公課	26,275,548	26,363,009
地代家賃	18,365,763	18,847,542
給食費	10,051,325	13,409,029
利用者工賃	6,953,475	8,127,325
業務管理費	18,012,206	15,326,649
講習費	11,941,151	10,504,050
自立支援費	10,736,568	11,678,006
支払利息	3,282,419	2,880,205
支払手数料	4,700,474	8,793,764
減価償却費	19,334,742	17,524,753
その他経費	36,216,226	37,355,711
事業費計	625,981,638	629,626,342
2 管理費		
(1) 人件費	41,711,339	49,982,306
(2) その他経費	29,230,267	221,990,202 ⑤
管理費計	70,941,606	270,990,508
経常費用計	696,923,244	900,616,850
当期経常増減額	116,486,634	-103,236,469
III 経常外収益	3,655	35,564 ⑥
IV 経常外費用		
1 雑損失等	200,288	390,349
税引前当期正味財産増減額	116,290,001	-103,592,254
法人税、住民税及び事業税	241,000	241,000
当期正味財産増減額	116,049,001	-103,832,254
前期繰越正味財産額	495,206,582	611,255,583
次期繰越正味財産額	611,255,583	507,423,329 ⑦

① 寄付金

2億円を超えるご支援をいただき、うち希望のまちプロジェクトのための寄付が130,278,121円ありました。毎月定額の支援をいただいている「ほうぼくサポーター」は1,500人以上を達成することができました。

② 助成金

助成金として、北九州市での子ども支援事業のため赤い羽根福祉基金から約200万円などが含まれています。

③ 補助金

補助金として、国土交通省居住支援法人補助金約270万円などがありました。

④ 事業収益等

不動産収益、事業収益、保険料収益、出向者負担金収益の合計です。

⑤ その他の経費

2023年9月に社会福祉法人が設立されたことにより、NPO法人が所有していた土地及び運営資金を社会福祉法人に譲り渡しました。その費用約1億9千万円が含まれています。

⑥ 経常外収益

経常外収益は、受取利息、固定資産売却益の合計です。

⑦ 次期繰越正味財産額

次期繰越正味財産額として、約5億円を繰り越しました。内訳は以下の通りです。
不動産：1.6億円
社福への譲渡金：2.9億円
活用できる流動資産の繰越は1億円弱となっています。この繰越金は、炊き出し等のボランティア活動経費や子ども支援事業費など、公的支援のない活動のための資金となります。また、「希望のまちプロジェクト実施」のためにNPO法人抱樸に託してくださった寄付は、建築の状況に応じて社会福祉法人へ譲渡させていただき、「『ひとりにはない』支援」をさらに推進していきます。



青野慶久（サイボウズ株式会社代表取締役社長）

生活困窮を自己責任にすることなく、社会で役割分担して支え合う活動に共感し、サポーターとして抱樸さんの活動を支援させていただいております。これからの社会においては、動きの遅い政治に期待し過ぎることなく、一人ひとりが主体的に行動することが大切だと考えています。みなさまもぜひ！



雨宮処凛（作家／活動家）

自分自身、支援活動をしながらも、本当に自分が困ったときに「助けて」と言えるかと問えば、そのハードルの高さに身がすくむ。だけど、なぜか奥田さんには言える気がしていて、そういう安心感が、みんなにとっての抱樸なのだと思う。助け合いの実践を、ともに広げていきましょう。



石原海（映像作家／ボランティア）

いままで訪れた場所でいちばんパンチの効いた場所が抱樸の花見でした。花が散ったあとの桜なき緑に囲まれて「花見」と呼ぶその日の熱狂と愛と、そこにいる人々の存在に痺れました。そして、気づいたらアタシは北九州に引っ越していました。抱樸の活動を目撃し続けなければいけないと思ったからです。大好き抱樸、がんばれ抱樸！ これからもずっと関わらせてください。



今井紀明（認定NPO法人D×P 理事長）

孤立はいくつかの安心できる場や所属先を失ったときに起こります。孤立すると社会のセーフティネットへ辿り着くのも難しくなり、深刻な状況に陥ってしまうこともあります。そのようななかでも「希望のまちプロジェクト」は、誰もがつながりをつくることのできる場所を実現していこうとしています。クラウドファンディングのときから、応援しておりました。社会における孤立をなくすためにも、このプロジェクトを応援したいと思います。



コムアイ（アーティスト）

正義と悪を決めて取り締まるようなやり方ではなく、どんな人も、誰ひとりとしてこぼれ落ちないように、やさしく強く、包み込む。日本は包容力のある社会だって自信をもって言える、そういう未来のために、抱樸の挑戦は大切な一歩です。日々のなかでそれを継続されていること、尊敬の眼差しで見つめています。



佐久間庸和（株式会社サンレー代表取締役社長）

抱樸はこれまでの「問題解決型支援」に加えて、つながり続ける「伴走型支援」へと活動の幅を広げてこられました。これはまさに“隣人愛”の実践であり、弊社が経営理念として掲げてきた“人間尊重”にも通じていると思います。今後も有縁社会の実現を目指して、同志として共に歩んでまいりましょう！



杉山春（ルポライター）

「希望のまち」は、たぶん、私たちにいろいろなことを教えてくれるはず。人はこんな風にとともに生きることができるのだと。自分は自分でいいのだと。自分にはこんなに人を助ける力があるのだと。誰でも未来に希望を持っていいのだと。生まれてきたことは、本当はとても幸せなことなのだ。そんなまちづくりに参加しませんか？



田口ランディ（作家）

抱樸の活動を見ていると、人間に寄り添い続ける慈悲を感じます。新型コロナウイルスの感染拡大のなかで人と人との繋がりが見直されています。このような社会の転換点に「希望のまち」構想が立ち上がってきたことは必然でしょう。社会的なピンチを、この国の舵取りを福祉に向けるチャンスに変えてくれるこのプロジェクトを、私は心から応援いたします。



玉木幸則（NHK Eテレ バリバラコメンテーター）

最近「だれひとり取り残されない」というようなことをよく耳にしますが、ほんまですか？と聞き返したくなります。今この瞬間にも、生きづらさを感じている人やその生きづらさにも気づかないままで、一生懸命に生きている人がいっぱいおられると思います。抱樸の「希望のまちプロジェクト」が、すこしでも「生きづらさの解消」へつながっていくよう期待しています。だれもがともに生きていくことができる社会にしていけるためにも。



永井玲衣（哲学研究者）

わたしは抱樸のサポーターであることが、とてもうれしいです。それは、この生きづらく、疲れ果てた社会を、抱樸が変えようとしているからです。一人ひとりに丁寧に向き合いながら、壊れた社会の流れに抗おうとしているからです。あなたと一緒に、抱樸を支えたいです。ここからこそ、社会が変わると信じています。



平田オリザ（劇作家）

「文化による社会包摂」は、すべての人にとっての「希望」です。応援しています。



平野啓一郎（小説家）

困難な時代を生きている。私たちは、自分の生活に安心が欲しくて、それを守ることに懸命になる。しかし、一人では限られている。真の安心とは、困難に直面した時、この社会に救済される場所があることである。その優しさを感じられることである。そのためには、まずは今現在、苦境にある人たちに手を差し伸べなければならぬ。抱樸がその拠点となることを期待しています。



平野健二（株式会社サンキュードラッグ代表取締役社長兼 CEO）

誰か自分以外の人を助けたら、まずは家族のことを思い浮かべよう。その家族が崩壊している家庭があったら、社会は真っ先に手を差し伸べるべきではないでしょうか。格差、貧困、育児放棄……原因はさまざまですが、まずは前に向いて歩みだす人を支えることに、勇気と希望を差し上げたいものです。



藤原辰史（歴史学者）

激しすぎる競争社会にさらされた近代家族には、構成員全員の苦しい状態に安らぎを与えるほどの力はほとんど残されていません。だったら、その家族制度からはみ出てしまった人たちの居場所や、近代家族を支えるようなもうちょっと緩やかで広い「家族」が必要だと、私は「縁食」という概念を用いて論じてきました。「希望のまち」はまさにそんな試みなので、応援せずにはられないのです。



みたらし加奈（臨床心理士）

命を脅かす“孤独”が訪れたとき、差し伸べられた手を掴むことは難しい。呑み込んでしまった「助けて」や、やっと言葉にできた「助けて」に正面から向き合い続ける姿勢は、生半可な気持ちではできないことではない。抱樸の背中を見ながら、「助けて」と言える社会のために、自分に何ができるのかを問い続けている。そしてこれからも抱樸の活動を応援している。



水野敬也（作家）

希望を感じることが少ない現代社会で、「希望のまち」は人の心に夢をもたらす大事な灯火だと思います。一人でも多くの人が、この火に小さな薪をくべ、大きな光にしていけることが、希望に満ちた社会を作るのだと思います。



村木厚子（全国社会福祉協議会会長／元厚労事務次官）

これまで抱樸は、困難を抱えた人々に寄り添い、「私たちがそばにいるよ」と声をかけ続けてきました。抱樸がそうした活動を続けることができたのは、抱樸を応援してくださる応援団がいたからです。抱樸のつながる力を活かして、さらに大きな応援団を作って、ますますいい仕事をしてください。



茂木健一郎（脳科学者）

誰もが、その場所に追いやられ、その立場になる可能性がある。だから、手を差し延べることは、未来の自分、あるいはそうなったかもしれない自分を助けること。奥田知志さんとは20年以上のお付き合いとなりました。奥田さんの他助と自助の人間どまんなかの伝言に全面共感。

抱樸をサポートするための3つの方法

抱樸の活動は、みなさまのご寄付によって支えられています。

支援を必要としている方々に届けるため、ぜひ財政的なご支援をお願いいたします。

①ほうぼくサポーター：1000円からのご寄付

抱樸の活動は皆さまからのご寄付によって支えられています。そこで、毎月定期的なご寄付をくださる「ほうぼくサポーター」を募集しています。初回のクレジットカード登録で、毎月定額の支援が可能です。(口座振替による登録もできます)。サポーターのみなさんには月1回、活動報告や支援現場の声をお届けする、読み応えのあるメールマガジン『ほうぼくサポーターかわら版』をお送りします。



②都度のご寄付

毎月ではなく、都度のご寄付もありがたくお受けしています。自由金額でのご寄付もクレジットカードの他、ゆうちょ銀行からのお振込みができます。

③遺言によるご寄付／相続財産からのご寄付

わたしたちの活動は、他人同士が会って、知り合って、支え合う「仕組み」をつくる活動です。「財産の一部を社会のために遣ってもらいたい」「遺産を相続したが、一部を寄付したい」—そのような想いを抱樸は受け止め、支援につなげていきます。しんどい状況に陥った人も、再び誰かと微笑み合える、そんな暮らしを、あなたの手で支えていただけないでしょうか。

ほうぼくサポーターやご寄付にご興味がある方は、右記のQRコードまたは抱樸HPをご覧ください。クレジットカード決済のほか、郵便振替でも支援いただけます。「ひとりにしない」社会を一緒につくっていきましょう。

寄付ページ▶
www.houboku.net/webdonation



ご支援を賜っている法人賛助会員のみなさま

(2024年3月31日現在)

一般社団法人 MHC リサーチ&コンサルティング

株式会社 M&M

株式会社 l'mbesideyou

株式会社 サンキュードラッグ

株式会社 サンレー

株式会社 新耕

株式会社 清栄

株式会社 ひまわり

株式会社 フラットアップ

株式会社 松波〈大邱(テグ)食堂〉

株式会社 山猫総合研究所

宗教法人 専念寺

大和証券 株式会社

認定特定非営利活動法人 日本ファンドレイジング協会

ラックユニティ株式会社

* 50音順に記載しています。

抱樸に参加するための3つの方法

①ボランティア

抱樸では、炊き出しやパトロールをはじめとした、さまざまな活動へのボランティアを募集しています。北九州でのお弁当づくり、炊き出し運営、パトロールはもちろん、遠方から支援に参加される方もいます。また、さまざまな事情で学校や塾へ通うのが難しい、小中高生の子もたちに、勉強を教える大学生ボランティアも募集中。(NPO 正会員になると、個人情報の守秘義務に誓約のうえ、個人に寄り添う活動にもご参加いただけます)

②「互助会」に入りませんか？

互助会は、誰でも参加可能な会員制の共同体グループです。月500円の会費で、イベントへの特待参加、入院見舞金や長寿のお祝いを受けられ、互助会葬も出すことができます。ここでは、「支援する人／支援される人」という線引きはありません。「おんなじいのち」の取り組みに参加するため、遠方にお住まいの方も多くいらっしゃいます。いつでも、どなたでも歓迎します。

③一緒に働きませんか？

抱樸では一緒に働く仲間を募集しています。フルタイムからパートタイムの仕事まで。ご応募の際はお電話でご連絡のうえ、履歴書をご送付ください。

お問い合わせ先

Tel: 093-653-0779

Fax: 093-653-0779

E-mail: npo@houboku.net

ボランティアや
求人募集については、
右記のQRコード
または
抱樸HPをご覧ください。



抱樸ボランティアページ▲ 職員採用ページ▲

事業所一覧

ほうぼく第2作業所

〒802-0084

福岡県北九州市小倉北区香春口2-6-1-2階

Tel: 093-967-8995

Fax: 093-967-8996

グループホームほうぼく

〒802-0064

福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13

ロイヤルプラザ 1階

Tel/Fax: 093-923-0845

日常生活支援住居施設・プラザ抱樸

〒802-0064

福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13

ロイヤルプラザ内

Tel: 093-922-8580

中間市市民生活相談センター

〒809-0018

福岡県中間市通谷1-36-10

中間市総合会館ハピナスなかま本館内2F

Tel/Fax: 093-246-1030

福岡県地域生活定着支援センター

〒810-0042

福岡県福岡市中央区赤坂1-8-8

福岡西総合庁舎 2階

Tel: 092-406-7895

Fax: 092-406-7896

NPO法人 抱樸(代表)

〒805-0015

福岡県北九州市八幡東区荒生田2-1-32

Tel: 093-653-0779

Fax: 093-653-0779

E-mail: npo@houboku.net

ホームレス自立支援センター北九州

〒803-0811

福岡県北九州市小倉北区大門1-6-48

Tel: 093-563-3069

Fax: 093-581-3566

巡回相談Tel: 093-571-1304

抱樸館北九州

〒805-0027

福岡県北九州市八幡東区東鉄町7-11

(デイサービスセンター抱樸 併設)

Tel: 093-883-7708

Fax: 093-883-7705

多機能型事業所ほうぼく(抱樸)

〒803-0811

福岡県北九州市小倉北区大門1-4-5-2階

Tel/Fax: 093-581-0901

抱樸かわら版DX(デラックス)

2024 vol.4

編集：江田初穂(抱樸)
谷瀬未紀(抱樸)
藤井陽子(抱樸)
北條みくる(抱樸)

デザイン：千原航

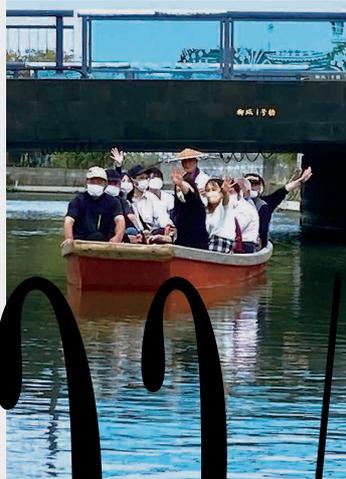
発行日：2024年9月30日

発行者：認定NPO法人 抱樸

〒805-0015

福岡県北九州市八幡東区

荒生田2-1-32



2023 2024